

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	龍南
Author(s)	鳥井, 匡
Citation	龍南會雜誌, 152: 46-52
Issue date	1913-11-05
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6285
Right	

海峽を渡らむとして

鳥井 匡

◎来るべき筈の時は来た否々最早以前に来て居る。
今日辛うじて來着したのでは無くして既に「時」
は來れること久しい。いはゆる「時」とは何の時
ぞや。

わが五高創立以來數十年。歌に曰くそれ西海の一
聖地濁世の浪を永久にせき健兒が胸に青春の意氣
や溢るゝ五高魂。時大正二年九月に到つて忽然
として突如として朝の海に太陽の顯れ出るが如く
アルプスの峯より雪嶺の墮るが如く東風一陣木の
葉を吹き拂ふが如くわが習學寮は自治を宣した。
嗚呼自治寮 自治寮 感じの深き言葉哉。自治と
は是れ團體の一人として個人の動作が歎美すべき
程度にあるよりして生じ語中自然に節制を含み活
動を含み就中能力を含む。時到りてわが習學寮は
茲に自治を宣した。来るべき筈の「時」とはこの時
である。然るにこの今にして來れる「時」を仔細に
見れば今日突如として倉皇として五高の門前に顯

れ出しに非ずして最早以前に五大洲に彌蔓して居
る「時」である。所謂時代である。とは又何の謂ぞ
や

◎試に思へ。西海の一聖地に根據を占め濁世の浪を
永久に堰かんとは何の意ぞ。五高魂とは左程貴き
もの。さ有るにわが「聖地」以外の「濁世」は既に既
に濁世乍らも自治の初聲に目を駭かしたのは遙か
の昔(吾人は政治家で無いけれども)況んや況んや
我が聖地をや。今日にして習學寮の別名を自治寮
と呼ぶを得たるが故に習學寮萬歲自治萬歳の叫び
聲に胸の轟き血の高か鳴りを禁じ得ざるが如き事
あらば千九百何年支那は中華民國の名を得憲法が
出來さうになり議會が物になりさうになつたが故
に民國の自由幸なる哉光榮なる哉世に類ひ無き哉
と云ふに異る所あらむや、民國の樹立は歡迎すべ
しとするもこの改革を促せる「時」は一九一一年に
俄然として民國の戸口を叩いたのでは無い。役人
任せの政治の如きは既に皆蒸せる墓石の下に尋ね
べく、社會の各個人は世にも尊き各個人の義務と
權利とに遺漏無からん様になりて然る後に團體總

体の事務委託として大臣大將知事總裁を要す、かくの如き「時」の民國をなとづれたるは豈一九一一年ならむや將た又斯くの如き「時」の習學寮を訪れたるは大正二年九月十一日ならむや。然らば來るべくして來れる時は今日卒然として來れるが如く見ねしも實はもう早々から來て居るのであつた。さらば如何にすべき。

◎道德説明家社會改良家の口吻を假に弄すれば才藝勇氣禮讓社交等無數の諸德相綜合せられて完全なる個人の自治をなす従つて力を要し努力を要し修養を要す（思へば自治とは大變では無いかかはぎに面倒なもの）この個人の自治ありて後漸く團體の自治をなす、故に團體の自治を圓滑にやつて行かんには先づ自治的能力を要し、結果としては協同生活の産し得べき最上の果を結ぶを要件とす自治の涙はひた／＼とわが「聖地」の垣をひたす事久しく漸戸口を開いてその水を入れたれど能くこの水に堪ふるや否や羊を牧はんには程よき牧場無かる可らず星の輝かんには朗かなる空なる可らず中華民國は悠々然とし衆に後れて自由の國

となり乍ら新しき耕作をせんに古き農具を用ひ肺病に對して腦病の藥を投じそれで毫も差支へ無しと思つて晏如たり。この故に南北戦争までもして損する所多し。何となれば孫黃二氏は孫黃に非ずして國民の代表者たる孫黃である故である。大正二年悠々然として我が習學寮は自治制となる敢て歡呼の聲を揚ぐる勿れ意外の時に寶物を拾へりと思ふ勿れ寶物は地に墮ちてすでに久しかりしなり唯拾ふことの遅かりしのみ。それよりも先づ心を冷かにして魚を獲んとして網に綻なきや否や敵を斬らんとして劍に鏽無きや否やを見よ、然らずんばこれ民國の二の舞を演ずるものなり。

◎新生徒監江部先生曰く「寮の空氣は學校の空氣」寮の性質は眞に此の言に盡く此の言を誠にして始めて寮は存在の意義を有す。先生は此の言を原則として碎礫躬を忘れて寮のために盡さんと期せらる。校風とは寮の空氣なり少くともその源である寮生及び通學生相待つて校を成せども校風を作るものは先づ寮内の空氣である。校風問題を議せんものは先づ寮の問題を決し寮生各個の完全なる自

治をだに得ば如何なる善美の校風をも求め得べく
剛毅木訥云々の如きは取るも可なり捨つるも可なり
吾らは形式以上に達する。斯くの如くになれば
特に校風に對して色彩を求むるを無理に要とせず
ともよろしい五高の校風は無色であつても恐るゝ
に足らぬ

◎一高は明治二十三年以來自治を布いて今に及ぶ五
高は大正二年に初めて布いて効果の如何につき恐
の無いでも無い。然らば彼に自治能力存すること
多く是に存すること少きか。さうは思はれぬ。さ
れど向が岡の六百の寮生中には稀代の秀才を出し
風變りの思想家を出し優に特長を以て天下に鳴る
の名物を出す極端なる道徳家あり危険人物あり千
態萬様にしてしかも一高タイプを以て天下の學生
を風靡す。而して我は如何 龍田鳳は日毎夜毎に
吹き白川の水は絶ゆる時なく流るれども山は低く
河は汚くして吹く風に晴嵐の趣なく流るゝ水は老
人の歩むが如く吾らは雄心の得どころが無い。こ
の故か非ずか 剛毅木訥と云ふ奇怪なるものが今
尙演説の材料となりて臃ろげ乍ら崇められて居る

何が故に奇怪と云ふか。五高の剛毅木訥とは服裝
の格言に過ぎないカーライルの衣裳哲學の類であ
らう。吾らの大事な格言は單に衣裳風采にのみ關
して呉れては大に困る。吾らはハイカラを恥づる
と共にバンカラを恥ぢとする。剛毅木訥と云ふが
如き單純なる思想に天才の生れやうが無い偉人を
生みさうにもない(但し危険なき小事務家は陸續
として生れん)

◎その昔ウィリアム征服王は佛蘭西の海岸より海を
渡りて英國を征服しそこに立派な王國を建設した
その後七百餘年を経てボナバルトは同じく佛蘭西
より海を渡りて英國を攻んとし上陸すらも叶はな
かつた同じイングリツシユチアンネルを通る事の
何故に前者に易くして後者に能はざりしか。ウイ
リアムは時利ありボナバルトは時不可なりしか。
さうかも知れず(吾々は歴史家では無い)五高の習
學寮は今自治の海峽を渡りて一新王國を建てむと
して居る。渡る事すらも叶はざるか。渡りて行ける
土地は住まれざる地にて又後かへりをせざる可ら
ざるか、或は又建てけん國は法政善美住むに心地

よかるべきか否か。今こそ吾らは自治の試みを爲しつゝある。蠻習惡風猶存して夜半床上に屹立し棒を提げてストームに備へざる可らざるか。寮雨晴夜に耳を驚かし窓下に草の肥ゆることの有りや無しや。炊事制度が明々白々の調理の下に進行するや否や。幹事に怪聞の絶ゆるや否や。頻繁極まる寄附金徵集親睦會の度數が減することの有りや無しや。されど之らは末である第一は中心は寮生全体の氣持である陳套の言を借りて云へば自覺である自治の自覺であるこれ無くんば生徒監に代りて幹事が事務を取るに到れる丈で内容は變すべき理は無い。然り「時」は今日にして始めて來たので無い、もう遅れて居るのだ。しかも今にして猶自治の海峡を渡らむとしてボナバルトとして終るならば吾らは限り無きの遺憾である。則ち自治の能力が無いと云ふことに歸する他人の世話の下にでなければやつて行けないと云ふ明証となるのだ

改革の要点を擧ぐれば

一、習學寮細則、第一條舊、寮生ハ生徒監監督ノ

下ニアリ……、

第一條新、寮生ハ自治共同ノ精

神ヲ以テ……、

第三條新、入退寮ハ生徒監幹事

協議ノ上之ヲ定ム、

第四條新、各室人員ノ配當ハ幹

事定ム、

二、殊ニ重キヲ衛生上ニヲキ新ニ風紀衛生係ヲ置

ク、

三、室員ノ組合セハ從來ノ一部、二部、三部ノ區別ヲ徹シテ相混ズ、

テネ、ラクス、

河馬君がどんやうに言つた、どんやう直ぐに同感し新入當時の感想を引きもどしてテネ、ラクスに書く事にした。

破れ袴と杉の下駄が彼等の表象である事の期待は極端な自由の憧憬である、「自由」の定義、根本義の錯誤せる者だとの叱責はあるかも知れないが新しく龍南に移住權を得た者の憧憬は極端な放任だと云つた

風の寫象を持つて來た、移住民は龍南をウンタアリ
ンデンたと思はないでキンバレエだと考へたがる、
杉下駄と赤いインクに蝕まれた袴とを結びつくるも
のは夢想と哲學との廢跡であり且その寶庫であるべ
き原野であらしめたく思ふ。

かくして新しき龍南移住民は先づ偉大なる松林の外
園に悦ぶ、極めて無格好な正門の殘骸に悦ぶ、けれ
ども彼等が只管本館の赤煉瓦に眩惑して第二門を這
入る時、彼等は憧憬に裏切られた傷心を享くるであ
らう、自由の原野に生を締められ、伸びんとする精
力が慘しくも壓抑された幾株の木が、不具者のやう
にいぢけ果て、光輝ある正面を飾てゐるのである、
私は心竊かに此の園を呼んだ、

「抑壓の園」

「誰れが植ゑたか」の對稱物であるぞ知つた顔する
因縁家は正門突き當りの姫小松を龍南唯一の風流で
あるかの如くいふけれど河馬君もどんやうもその姫
小松を好まない、それは「抑壓の園」の入り口を飾
るために植木師の手によつて虚飾の權化を呈示して
ゐるからである、此の姫小松を補うためには圓形に

刈り込まれて偃僂の醜惡を呈してゐる權木が盛り上
つてゐる、偃僂の木は春に伸びて夏に豊かな日光を
濃葉から吸集しやうと思つてゐながら彼等は「壓抑
の園」に移植された爲め、新移住民の來る時分に丁
度「虚飾の權化」と變つてゐるのだ。

龍南新移住民がこの「抑壓の園」に限りない不快を
感じながら少し落ちついて校門を出る時彼等は第二
の、より大なる不快に呻される、我等は自由である可
き龍南に來て囚人と誤たれてゐるではないか、吾人
の悉くがジャンバルジャンであるならば吾人は罪惡
を豫想され辛辣な防禦を設けられてもその時改めて
反抗するであらう、けれども吾人は野蠻の狀態に或
る物を克得せんとする「杉下駄」のモットウがあるこ
云へ、吾人の朴訥は罪惡と決して混交しないのだ、
美しき花園は鐵條網に圍れてゐる 吾人が不注意に
近よれば吾人の衣を裂き吾人の肉を刺す鋭き棘が一
尺の長さに幾つかの割合に並んでゐる、

棘針は人間の肉を裂き血をす、らんが爲めに作られ
た、吾人がこの柵に近寄る時は吾人の肉を裂き血を
啜る可く待ち構へてゐるといふ事である、人類の肉

ど血が園内に植ゐられた植物より價値のないものであるといふ事を表示してゐるのだ、しかく肉体に價値のないものは昔から奴隷と稱され囚人と思はれた囚人の逃亡を防ぐ爲めの恐怖の絶壁は硝子の破片やひつそぎ竹や針金の鋭き棘に武裝してゐる、囚人が逃亡する罪惡は囚人の血と肉との犠牲よりも高價である斷定よりこの武裝がありとすれば、若し吾人の間に花盜賊がゐた時にその罪惡は囚人の逃亡と同價値であるとの斷定がこの鐵條網である、日露役に要塞防禦に用ひた鐵條網が針棘を植ゐた針金であるを知つたのでこの針棘を植ゐた針金を普通語に鐵條網と呼ぶ、抑壓の園に不快を感じたる者は刑囚の爲めの園ひに侮辱を感じざるを得ない其の棘針に肉を傷けられ血を啜らるゝ不幸の者は囚人の逃亡と同罪視されたる花盜賊ではなく、事實單に不注意の結果惡棘な鐵網に氣つかないでその柵に寄り添うた者である、無辜の不注意者は血の課税を拂ひ、花を盜む者はそれに刑せらるゝの愚を爲さぬから吾人の凌辱はやがて吾人が誣告さるゝ事となる、丁度小學兒童の通路に當るので其跋扈跳梁を豫防するといふ理由や

周圍は嚴しく防禦してあるが入口は自由に開放してあるのだからといふ理由などは「辛棘の園ひ」を辯護するに最も薄弱なるものである、要するに花は人間の血より高價であつてはならない、花木の損害はあつても人間の血を以つてこれに代ふる理屈は成立さしてならない、況して龍南生活者は花盜賊でなく、花を折らしめない方法は他にも求めらるゝ筈だ、この凌辱と誣告と不体裁とは抑壓の園の比でなく一刻も吾人の堪へられない不満である、習學寮は自治に獨立した、正門を飾る花園も凄じき武裝を除く可きが當然であるまいか。

新移住民諸君はかう思つたかも知れない、河馬君と云ふやうはかう思つたであらうと信じてゐる。

新入生諸君へ

苦しい試験の難關を無事に通りぬけて、勇ましく登龍の門に花々しい扮装で攀ち上られた三百有餘の潑潑たる若武者を、新たに同じ學び舎の友として迎へぬた事を衷心から満足の情を以て御挨拶申し上げます。

"Happy season of virtuous youth, when shame is still an impassible barrier, and the sacred air-castles of hope have not shrunk into the mean clay handlets of reality; and man, by his nature, is yet infinite and free."

理想! 何と云ふひびきのいい詞でせう。

光榮! 何と若若しい血をそそる詞でせう。

私達も一度は経験のある處ですが、放なれたる籠の鳥はあの印象の深い濟美館の入學式に於て先づ一種云ひ知れぬ森嚴の感に打たれ、次いで寮の觀迎會や茶話會などに獐犖にだて上げられ焚き付きられて、今迄の「坊ちゃん」が一足飛びに所謂 gentleman と成り濟まし、人も許し我も許して耻かしいやら嬉しいやら、斯くの如くにして空々寂々茲に一學期位は槿花一朝の夢と瞬く間もなく過ぎ去つてしまふものです。

福澤の慶應義塾に來て見ればコチヤ噂に反比例覺むれば一片眞如の月、冷やかな理智を懷いた批判者の立場から考て見たならば、蜜の甘きに憧憬れて來た白三筋の生活もどうやら貧弱で意義が無さ相に思はれて來るかも知れませう、幻影消滅の悲劇は或は浦若い柔かな赤血球に煩悶の分子を蒔き散らすかも知れませう、併しながら夫は凡て諸君各人の立脚点の如何にある。龍南三年の生活に意義があるかないか、問題は最早夫にあらずして「あらしむるかなからしむるか」に存する。ガカンと口を開けた傍觀者、諸君は徒らにあの傍觀者の態度を撰擇して居ては滿らない。此處に努力が起り其處に奮闘が産み出されればならぬと思ひます。た互に一つきたはれませう。